

長崎燈会に中国の面影を求めて

松尾 法道

今年も、長崎の春を彩るランタンフェスティバルが二月十八日に開幕、二週間に渡って長崎の中心街や中島川沿いには赤いランタンが掲げられ様々楽しい行事が展開された。

一九八七年以来、長崎中華街で祝ってきた中国の春節祭(旧正月)に、一九九五年より長崎市も冬期観光振興策の一環として、この催事に参画し新地に隣接する湊公園をメイン会場とするなど、その規模をいつきよに拡大し、名称を「ランタンフェスティバル」とし市民あげての行事としてスタートをきった。

以来、年々人出も増え、より多くの市民と観光客で賑わった。

会期中、興福寺では恒例の「東明包子の会・豚まん手作り教室」が開かれた。名古屋在住の檀家が毎年春節になると二百個もの手作り豚まんを寺にお届け下さる。此の豚まんがあまりに美味しかったので、この期間、講師として檀家の女史をお招きし、教室を開設したのが八年前。女史の敬愛する曾祖父ご出身の上海豚まんの味を再現して戴いた。



興福寺 媽祖堂

上等な豚肉、タケノコ、

自の粽で、他から来た人たちも、あの中国風な風味に馴れると、やみつきになると言う。

何と言っても鎖国時代の一七〇〇年頃、一年間に長崎に來航した唐船は約六百艘で、オランダ船はその十分の一の数と聞く。多くの中国人の達が來航し、多くの文物を伝えていくことがわかる。更に重要なことは中国から多くの文化と共に哲学・思想等が伝えられたことである。

その担い手が長崎の唐寺に上山した唐僧達である。特に興福寺に上山した明の高僧隱元禪師は日本文化に最も大きな影響を与えている。隱元禪師が伝えたものには隱元豆、西瓜、茄子、蓮根、孟宗竹、もやし、胡麻豆腐、ゴマ和え、ケンチン汁などの食文化に限らず印鑑、木魚、釜入り茶、煎茶などもある。

更に其の中の一つに丸いダイニングテーブルがある。日本では一人一膳で身分の上下別に食していた食事を、一台の丸テーブルを囲って、共に食事を摂るといふ文化を伝えていく。これは明治になって「ちゃぶ台」として日本に定着する。この食事は、食卓の上のご馳走を唯食べるだけが目的でなく、テーブルに座った人々が料理を共にし親睦を図り、理解し合うことを第一としたのである。つまり、食事の際に相手に対する思いやりを大切にすること。一つの器にもられたものを互いが相手を思いやっていたこと、これが隱元禪師が伝えた食の思想である。

長崎燈会の会期中、興福寺は唐船が長崎に寄港した黄金時代に航海の守り神とされた女神「媽祖様」を入港時にお預かりする媽祖行列を再現する行事がある。この珍奇な行列にもそれぞれ意味があり、鎖国時代、長崎人は喜んでこの行列を迎えたという。

その媽祖行列が向かう興福寺の境内は其のとき中国そのものとなる。必見は、本堂内の日本一の中国ランタンと称される瑠璃燈で市有形文化財に指定されている。その瑠璃燈は清朝末期の中国と上海の西洋趣味が織りなす華やかさを今に伝えている。

私は、このランタンフェスティバルを機に、長崎の魅力を織りなす唐文化、鎖国時代唯一世界に開かれていた長崎の面影をぜひとも多くの方々に、親しんでいただきたいと切に願っている。

(長崎・東明山興福寺住職)

干しシイタケ、キャベツ、白菜などをたっぷり使った熟々のまんじゅうをほおぼるとき、誰もが幸せな気分になる。そして、野菜を刻み、肉をこねながら語る女史の思い出話は戦前に遡る。「風頭でハタ揚げして興福寺でご馳走をいただいた」「カルルスでお花見して興福寺でご馳走になった」。ではどんなご馳走だったかと尋ねると、これが「饅頭」で、熟々の真つ白な饅頭や胡麻パンの中にいろいろなものを含んでいたのだと言われる。

なにか行事があると、必ず興福寺に集まって、みんなでご馳走をいただいたというのが幼少の頃の思い出である。

饅頭にはさんだのは恐らくは、「東坡肉」や野菜の炒め物ではなかっただろう。そういえば、ランタン期間中の人気の「角煮饅頭」の角煮は、中国浙江省の省都・杭州の名物料理「東坡肉」なのである。

宋時代の詩人で杭州の知事だった蘇東坡がこの豚肉の煮込みが大好きで「每朝二碗は食べていた」とかで、この詩人の名が料理に付けられたという。杭州にはもう一品、彼の名前をもらった料理「東坡魚」がある。

西湖でとれる草魚を唐揚げして甘酢あんをかけたもので、魚を蒸したり揚げたりして、甘酢あんをかけた料理である。そして、この料理は現在、日本では一般的になっているが、もともとは中国江南地方から來航した唐船の人達が長崎に伝えたものである。

また、春には人気の桃カステラがある。桃は中国の原産、神話時代に日本に伝わったそうである。中国では、桃の実が邪気を払う力があるとして珍重され、長崎の唐寺の門や屏などにも彫刻のモチーフとして使われている。桃饅頭、桃カステラなど、いまでは長崎の祝い事には欠かせないお菓子も中国から傳來し、長崎化したものと言えよう。

このように見ていくと、長崎に暮らす私たちの身の回りや、言葉、習慣、年中行事などに残る中国の影響は枚挙にいとまがない。

例えば、長崎の端午の節句には欠かせない「唐アクちまき」は長崎独

風信

○能登地方の地震の報に接し、今更ながら長崎地方は地震の少ない地方と言われてきたが、非常の事態は何時おきるかわからないので、日頃より防災の備えは心しておくべきだと考えさせられた。

○四月・五月と言えば八日の「花まつり」。二十一日弘法大師。「春雨まつり」と続く、まさに「柳桜をこきまかせて みやこは、花の錦なりけり」と春は爛漫である。

○次に五月に入ると最初より、三日「憲法の日」。四日「みどりの日」。五日「こどもの日」と連休が続く。そこで私達は「親子で、開港前(五〇年前)の長崎の街(村)を訪ねて歩いてみよう」と提案した。協力者も多く、五月四日、午前十時長崎市桜馬場町天満宮に集合。出発することにした。自由参加・会費不要・正午すぎには解散予定。但し雨天中止。

○そこで、私は其のとき歴史の問題を出し、親子で相談し、史跡を訪ねてもらおう事にした。例えば、「長崎氏の城下口は夫婦川と言ったが、其の地名の由来は」。「長崎開港前頃の教会は何処にありましたか」。「長崎氏の最初の古城は何処にあったか」等々。(勿論・相談員はつけます)

○先年、長崎を取材され、小説「甲午丹」を発表された故森瑤子女史のお父さまで、文学者の伊藤三男先生より「カタカナ外来語物語」と「付・江戸と長崎オランダ正月」の草稿四二七Pを戴いた。伊藤先生は、もう九十才を越されておられるはずである。その草稿には次の御手紙が添えられていた。

○「昭和五十六年頃でしたか、初めて長崎を訪ねました。娘(森瑤子女史)と話して小説「甲比丹」を書くためでした。小生、昨今は足腰が衰えた外は大過なく、気が向けば遊筆をつづつていきます。その学識の広い事。論考のすばらしさ、年はとつても是くありたいと思っている。

○五月一日、私が故十八銀行取頭清島省三氏より長崎歴史文化協会の設立を依頼されてより二十五周年になる。私の周辺にも当時の人達は多く亡くなられてしまわれた。思い出の多い二十五年であった。最初、私は十八銀行七階書庫の窓際に机を一つ置いて戴いて、どうしようかと考えていた頃がなつかしい。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 二F

